安楽寺寺報

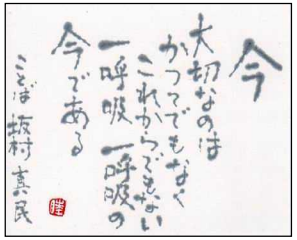
聞光

第98号
涅槃会号

発行所
〒737-0054
呉市上山田町2-28
安楽寺
TEL：0823-21-7561

信心の喜び

信楽　晃仁



「故　坂村　真民さん」

右は今年の安楽寺法要カレンダーの言葉で仏教詩人、坂村真民さんの「今」という詩です。この詩から前住職が言っていた仏教の時間論が思い起こされます。前住職は色紙にこういう言葉を残しています。

昨日は今日、明日も今日

過去とは「過ぎ去った」ことであり、未来とは「未だ来たらず」であり、過去という時間も未来という時間も今はなく、あるのは常に今という時間しかない。

それが仏教の時間論だと話していました。今、今今、と現在を生きていくしかないのが私たちであるというのです。真宗学シリーズ第五巻の「真宗求道学」には仏教の時間論を述べた上で六つの定義にまとめています。

「一・存在が時間である。二・時間とは無明である。三・時間とは主体的である。四・時間とは現在のほかにない。五・時間の相続とは非連続の連続である。六・時間とは「さとり」「信心」、その永遠の境地において知られるものである。」

難しい表現もありますが、理解できるところもあります。そして最後の六の通り「時間とは「さとり」「信心」、その永遠の境地において知られるものである」のです。本当の時間とは迷いの身にはなかなか感得できないものだということでしょう。詳しくは前住職の「真宗求道学」にゆずります。

さて、この詩も心に残ったのですが、このほかに、もう一つ大変心に残る詩がありました。どちらにするか大変悩んだのですが、法要カレンダーには掲載しなかったもう一つの詩をご紹介します。その詩は、

悲しみや苦しみの中から
信仰が生まれてくるかも知れないが
信仰がゆきつくところは喜びである
どんなに悲しいことがあっても
どんなに苦しいことが起こっても
それを喜びに変えてゆくのが
本当の信仰であり、信心である
どうして自分だけが
こんなつらい目に会うのであろう
そういう心がいつもどこかにあって
信仰している人があったら
それはまだ本ものでもなく
また本当に佛さまの心が
わかっていないのである。

お経の中には「信心歓喜」といわれ、お経の最後は「歓喜」で締めくくられます。全く真民さんの言われる通り、信心はやはり歓喜に連なるものだと思います。それが喜べないと言うことは、本ものではないと真民さんは言われます。ただその喜びとはどういう喜びなのでしょうか。

仏法を聴聞しても、「喜びが生まれない」と言うことは昔からよく話題になってきたことです。そんな時に決まって、引合に出されるのが歎異抄第九条の言葉です。唯円房が親鸞聖人に自らの心中を吐露してこう言うのです。（歎異抄第九条の意訳）

「念仏しておりましても、おどりあがるような喜びの心がそれほど湧いてきませんし、また少しでも早く浄土に往生したいという心もおこってこないのは、どのように考えたらよいのでしょうか」とお尋ねしたところ、親鸞聖人は次のように仰せになりました。

「この親鸞もなぜだろうかと思っていたのですが、唯円房よ、あなたも同じ心持ちだったのですね。よくよく考えてみますと、おどりあがるほど大喜びするはずのことが喜べないから、ますます往生は間違いないと思うのです。喜ぶはずの心が抑えられて喜べないのは、煩悩のしわざなのです。そうしたわたしどもであることを、阿弥陀

一枚の写真

信楽　慧

==========

この写真は、先日神奈川県の鍋割山という山に登った時の写真です。

この山は、頂上の山小屋で鍋焼きうどんを食べることができ、この写真の富士山を見ながら鍋焼きうどんを食べた時に取ったものです。景色と登山の達成感でとても美味しい鍋焼きうどんでした。

この鍋割山を下山している最中に、道に横たわったまま動かない鹿に遭遇しました。近くにいた男性いわく、「狩猟解禁によりハンターに撃たれたが、急所を外れて逃げてきて、ここで力尽きたがまだ生きているのだろう」ということでした。
近くに寄ると、体はピクリとも動きませんが、鹿の顔を覗き込んだ時、衝撃を受けました。

その血走った目はギョロギョロと動いて僕の目を見返しました。そこに僕は、次の一瞬一瞬をなんとしてでも生きようとする生命力をひしひしと感じました。こんな生命力に溢れた目は初めてみました。動物だからなのか？とも思いましたが、動物園でもこんな目は見たことありません。本当にその目から生きようとしている強い意思を感じました。

振り返ると、毎日が当たり前のようにあると思い、一瞬一瞬に集中せず、なあなあに過ごしてしまっている自分がいました。それとともに、こうして死んでいく命があることもかわいそうに思いました。

今回「生きる」ということ「生命」ということを色々と考えさせられた登山でした。

==========

編集後記
東日本大震災から十年が過ぎようとする二月一四日。また東北を中心として大きな地震が発生しました。震度六強という地震で、多くの被害が出ました。新型コロナウイルスも災害。私たちの日常は災害だらけです。今年二月二二日（旧暦は聖徳太子一四〇〇回忌になります。聖徳太子は一四〇〇年前に「世間虚仮、唯仏是真」といわれ、私たちがこの世で当てになるものは何もない。ただ仏のみぞまこと。とお示し下さっています。一四〇〇年前の知者の言葉に耳をかたむけたいものです。（K）

安楽寺マンガ通信

その48　信楽めぐみ作

仏ははじめから知っておられて、あらゆる煩悩を身にそなえた凡夫であると仰せになっているのですから、本願はこのようなわたしどものために、大いなる慈悲の心でおこされたのだなあと気づかされ、ますますたのもしく思われるのです。」

昔から多くの方が、この喜びということにこだわってきました。それはなぜかというと、本当の信心があるのかないのか、それが一大事だったわけです。みなさんの中で信心は、あるいは喜びはいかがでしょうか。我が心の中をのぞいてみても、信心があるようで、ないようで、ハッキリしない。信心による喜びさえあればと、今度はその喜びを探すのですが、その確固たる喜びも見えてこないわけです。そしてこの喜びとはどういうものなのかです。

妙好人の浅原才市さんはたくさんの詩をよまれました。後にその詩をまとめた書籍にたくさんの喜びの詩が並びます。その中に喜びのヒントがあるように思います

ありがたいのが　ありがたい
ありがとうないのが　ありがたい
ありがたいのが　法(仏)のかた
ありがとうないのが　機(私)のかたで
ありがとうないのが　ありがたい

むかしは　ありがたいこと
たよりにおもい
なんともないこと　ちからをおとし
いまは　あろうがあるまいが
ごおんうれしや　なむあみだぶつ

信心の喜びとはこういうことなんだと改めて学ばせて頂くことです。私の中にあるとかないとかではなく、大きな阿弥陀如来のお心にであえたことによる喜びです。私の煩悩の喜びではなく、信心の喜びですから、私が思う喜びは大きく越えたものです。はじめの時間論と同じく、迷いの身ではなかなか感得できないものかも知れませんが、私が喜ぶ喜べないといっているような小さな喜びではないのです。

前住職が残した信心の言葉の中にも「私たちは限りない宿縁に恵まれて、今ここに仏法を学ぶ身とさせて頂きました。まことに大きな喜びであります。」とあります。仏法を学ぶ身にさせてもらったというのは仏法にあうご縁を色々と頂いたのです。辛いことも、悲しいこともうれしいこともあったかも知れませんが、全てが私を、仏法へと導いて下さったのです。そのような身だと知らせて頂き、これは大いなる喜びだと教えます。

親鸞聖人のお言葉や、浅原才市さんの詩前住職の言葉には、全てをすっぽりと包み込んで下さる仏さまの大きなお慈悲にであえた喜びというものが感じられます。その私の全てを丸抱えして下さるお慈悲にであえている大安心を「信心歓喜」といわれるのではないかと思います。

坂村真民さんの詩から、私たちの信心を考えるご縁となれば、これもまた大いなる喜びであります。

暮らしの中の仏教語
「　彼岸（ひがん）　」

「暑さ寒さも彼岸まで」「ひがん花」「ひがんだんご」などと彼岸は昔から日本人に親しまれた国民的行事です。

彼岸とは文字通り、向こう岸のこと。インド語の「パーラミター」の漢訳「到彼岸」を略したものです。そして、私たちの住む迷い多き此岸（しがん）から、煩悩の川を渡り越えて到達する仏の世界の事を彼岸といいます。

春分・秋分の日を中日とし、その前後一週間のあいだ、寺々では彼岸会という法事が勤められ、祖先をしのび、墓参や寺院に参詣する習慣がありました。この彼岸会は日本独特の行事で、他の仏教国にはないものだそうです。彼岸とお盆が国民的年中行事になったのは日本人の強い先祖供養の意識によるものだと思われます。仏教徒としては二月十五日の涅槃会（釈尊入滅の日）、四月八日の降誕会（釈尊誕生の日）、十二月八日の成道会（釈尊が悟りを開かれた日）の仏教徒の重大記念日にも注目し、できればクリスマスやバレンタインよりもこうした　仏教的記念日を生活に残していきたいものです。

お念仏のしずく

三つの生命…

私はものの生命（いのち）にはおよそ三種の生命があるといいうるように思います。その第一の生命とは、もっとも素朴な生命のことで、微生物に宿っているような生命、さまざまな植物に見られるような生命のことです。人間についていえば細胞の生命です。人間の身体は総計五十兆くらいの細胞によって成り立っていると言われます（諸説あり）。その細胞のひとつひとつに生命があるわけで、それはつねに休むことなく次々と分裂して、古い細胞は死んでゆき、新しい細胞が生まれてきます。何か月かのあいだには、細胞の全部が入れかわってしまうのだそうです。そしてそのような細胞は、たとえ人間が死んでも生きているわけです。土葬した死体を何日かめにだしてみたら、口ひげや爪がのびていたといわれることがありますが、これはその死体の細胞がまだ生きていたことを物語るものであります。最近やかましくいわれるようになった、心臓や腎臓の移植ということも、このように、人間は死んでも、細胞は生きているということから、それを取りだして他人の身体に移植しようというのです。生命というものを問題にするときには、先ずこのような、もっとも素朴な生命というものが考えられます。

そして第二の生命とは、人間ひとりひとりの個体を成りたたしめているような、人格としての生命をいいます。そのような生命は、たんに人間のみではなく、犬や猫などの全ての動物にもひろげて考えることができましょう。第一の生命体としての細胞がたくさん集まって、ひとつの個体、人格や犬格、猫格が形成されている、そういう個体における生命です。このような生命は、第二の生命といわれるべきものでありましょう。この第二の生命は、第一の生命に支えられ、その新陳代謝によって成りたち、相続されてゆくわけであります。ふつう私たちが生命といっているものは、このような個体としての、第二の生命を申しているわけであります。

しかしながら、私は今ひとつ、そのような第一の生命、第二の生命に対して、第三の生命というもの、先ほど申した宗教的な叡智によって見いだされるところの、宗教的な生命ともいうべき生命を思うのです。それはひとえに、念仏において、信心を開くことにおいて、仏からたまわるところの「仏の生命」であります。それはもはや、この世の生命ではありません。この世の生命は、いずれ限りある生命であり、迷えるものとしての地獄ゆきの生命でありますが、この仏の生命とは、無量寿として、信心の開発において「如来の家に生まれる」ことによって、また「後念に即生する」ことによって、仏よりたまわるところの永遠の生命であります。肉体は滅びても死ぬることのない生命です。

「この道をゆく」

安楽寺法要案内

--彼岸会法要--

日時　３月２７日(土) 朝席
　　朝席10:00～

講師　住職自勤
講題　私の歩む道

--宗祖降誕会--

日時 ５月１５日(土)朝席・昼席
　　朝席10:00～・昼席13:00～

講師　能美　勝善寺
　　法林　英俊　先 生
講題　アミダのいのち

--永代経法要--

日時 ６月１９日(土)昼席
　　６月２０日(日)朝席・昼席
　　朝席10:00～・昼席13:00～

講師　長門　浄土寺
　　荻　隆宣　先 生
講題　信心の智慧